

京鹿子

平成二十五年六月一日発行
通巻一〇六六号(第1回14頁)



6月号

豊田都峰

灌響集 その四十六

しやぼん玉どこまで入る青き空
序破のみに果てし朝のしやぼん玉
しやぼん玉はじけて童も果てにけり
石庭へ残花のみちとなりゐたり
照り茅花雲はほぐれをくりかへす
日の飛ぶは茅花か今日の試歩かへす





おぼろよりぬけてひとつの灯を得たり
おぼろめく底にひとつの灯の想ひ
雉鳴いて寺へのみちの丘がかり
雉の鳴く裏山の辺の雑木みち
ハライツを信じし右近の若葉の像
槻若葉右近の城下町にして
松本鷹根句碑建立
句碑建つや弥生湖国のまんなかに



—丸山佳子作品—

京・薪能

丸山佳子



衣更へて能のあはれに涙しぬ
鬼女舞うて花橘の香をみだす
鷺の舞卯の花月は天そらを統ぶ
茶摘女の眞顔にうたふ戀の歌
踏みすべりたる梅雨茸のしたしき香

秀華採集

記紀の世のあかずの文庫よなぐもり

鈴 鹿 けい子

記紀の世は謎だらけ。まさしく「あかずの文庫」。もし開けたら更に混沌とするに違いない。薄暗い開闢の世の如く「よなぐもり」を組み合わせるのはよい。

山焼くや眉のしづかな阿修羅像

宮 田 千 優

白鳥を百まで数へ沼傾ぐ

佐々木 紗 知

戦いを挑む時代の阿修羅であれば騒いだにちがいないが、今は悟りのなかである。後句は数えきれないという状態を「沼傾ぐ」としたのは手柄である。



— 近 詠 —

鈴鹿 仁

松の花

城郭のしづごころなる松の花
幟立つ太歳神のちから風
はらはらと世をうら返す夏落葉
夏柑の苦味この世のこととして
風だよりあの日は遠く夏蜜柑



— 近 詠 —

故山

和田 照海

日の暈に陣を解きたる浮寝鴨
引く鴨に水そはそはと日を返す
雛の灯の昼をともして隠れ里
犬ふぐり径は故山へいざなへり
遠蛙母屋は山のごとき闇



黄砂 北村香朗
 突然に黄砂降る日となりにけり
 黄砂降る超高層の立上り
 鶯の声もかすむや黄砂降り
 ビルの窓より下弦の月を眺めをり
 おそがけの下弦の月を眺めをり

菊根分

藤岡紫水

風の綾日の綾乗せて春の水
 釣り上げし諸子の鼓動手掴みに
 いかほどの余生ありやと菊根分
 暖かや影も首振る張子牛
 一滴の酢で繋りけり分葱和へ

松田都青

胃の中は時雨て居たりと言ふ診断
 投げ賣りの仏壇買ひし一茶の忌
 動かせぬ天地無用と言ふ寒さ
 薪を割る敵も味方もなき孤独
 枯れてゆく喜びもあり西行忌

親離れ 竹貫示虹
 竹落葉親離るるは風まかせ
 汚れてはやぶれかぶれの蓮根掘
 枕頭に挿せし紫陽花今年又
 シャンプーを逆さに立てる梅雨の入り
 妻の名を呼んで供へるさくらんぼ

梅一輪日和

北川孝子

元通りたためぬ地図や山笑ふ
 細心の気構へ梅一輪日和
 岸辺行く虚実のあわひ雪螢
 春障子どこかで醬油焦げてぬし
 梅の東風朝の和音を乱しけり

柿若葉

柴田朱美

柿若葉光の乱舞もてあそぶ
 風と窓とひかりあひつつ柿若葉
 みほとけに遊び足あり柿若葉
 夫の背のどこか寂しげ柿若葉
 何もない空が重しと柿若葉



猫柳丸井巴水
水槽の河豚を眠らす巻き暖簾
拳骨のこつの連峰雪解晴
許さるる嘘あり寒の明けきらず
春眼の夢より覚めて音探す
猫柳明日あるつもり箸を擱く

桜吹雪 塩貝朱千
咲き満ちて花は愁ひをこぼさざる
瓔珞のやうに枝重るる夕ざくら
桜吹雪生き死にのことかろやかに
門院桜思慕深ければむらさきに
煌めきは千手菩薩となる新樹





京鹿子集

豊田都峰選

記紀の世のあかすの文庫よなくもり

京都 鈴鹿けい子

佐保姫をつまづかせぬる等高線

どのビルも残る寒さの新宿区
流水期末完の一句捨てました

春霞ロバのパン屋のひづめ音

椿咲く再会信じ友送る

アリソナ 伊吹 之博

啓蟄やメトロ出口の呼吸器科

啓蟄や砂漠の地にも鼓動有り

山焼くや眉のしづかな阿修羅像

逆境を意気を感じし春の雁

豊中 宮田 千優

寒明や卒寿の姉を訪うてみむ

啓蟄や戦地の手紙命日に

美容師は男性ばかり室の花

名のみ春風の便りは母の声

オハイオ 水谷 直子

人気なき部屋に居据はる余寒かな

寒明やより早口にアメリカ訛り

白鳥を百まで数へ沼傾ぐ

歩みゆく音きしきしと如月の道

千葉 佐々木紗知

息継が聞えてきさう冬椿

キルティング針先みつめ浅き春